

産地直売場で実践する環境教育

ー長野県伊那市の産直市場グリーンファームを事例としてー

小関一也（常磐大学人間科学部）

キーワード：産地直売所、遊び仕事、アクティブ・ラーニング

本研究は、長野県伊那市にある「産直市場グリーンファーム」（以下グリーンファーム）を拠点とする調査研究の一貫であり、本発表では、その経営者である小林史磨会長と小林啓治社長、近隣にある伊那西小学校での聞き取り調査をもとに、産直市場をフィールドとする、新たな環境教育プログラムについて報告する。

グリーンファームには、大きく3つの特徴が見られる。第1に、多様性に開かれた場として、さまざまなモノや人が混在する楽しさに満ちている。商品の種類や品質のバラエティはもちろん、不思議な品揃えや、登録会員や従業員構成の多様性は圧巻である。第2に、人と人、人と自然、人とモノを結ぶ「つながり」の場になっている。生産者と消費者、地域の自然（の恵み）と住民、不要なモノと必要な人など、さまざまなつながりを生み出している。第3に、既存の価値を乗り越える「変容」の場として、持続可能な地域づくりに貢献している。高齢者の雇用や生きがいつくり、「地元の困った」を引き受ける姿勢に加えて、大量生産・大量消費の問い直しや、生産者（農家）の主体性の回復にもコミットしてきた。

こうしたグリーンファームの特徴から、先進的な産地直売上には、環境教育プログラムのフィールドとして、次のような可能性が内在していると考えられる。

- ①現代急速に失われつつある、多様な「遊び仕事」に出会える場
- ②自然の恵みや人とのつながりを大切にする「自然共生型の生活文化」が息づく場
- ③「SD(持続可能な開発)」の視点から、現代生き方や地方が抱える問題（高齢化や過疎化）と向き合える場

加えて、このように特徴づけられるフィールドでは、以下のような「主体的で、対話的な、深い学びが可能である。

- ①命のつながり：地域の自然の豊かさや、自然と人の暮らしのつながりを体感する
- ②自然と共に生きる：現代生活の再考（大量生産・大量消費、経済市場主義など）
- ③地域に誇りを持つ：持続可能な地域づくり（地域の高齢化の問題、若者の都市流失の問題など）

本発表では、フィールド調査から抽出した①体感する、②対話する、③行動するという3つの実践の視点を基軸に、グリーンファームの近隣の小学校での実践を想定し、環境教育プログラム案を提示してみたい。

※本研究は、科研費基盤研究（B）「産直が拓く環境教育の新たな地平：『遊び仕事』の現代的活用をめざして」（研究代表：宮城教育大学溝田浩二）の一環である。